

マハーバスツ地獄品の研究

高原, 信一

<https://doi.org/10.15017/2328798>

出版情報 : 哲學年報. 18, pp.257-275, 1955-11-30. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

マハーヴスツ地獄品の研究

高原信一

凡例

MV = Mahāvastu, ed. Senart, Paris, 1882, 1890, 1897.

Mvyut. = Mahāvvyutpati, 楠亮三郎氏、京都、大正五年。

Edgerton Dict. = F. Edgerton, Buddhist Hybrid Sanscrit

Dictionary, Yale, 1953.

Edgerton § = F. Edgerton, Buddhist Hybrid Sanscrit Gr-

ammāt, Yale, 1953.

大正 II 大正新修大藏經。

(渡邊 II 渡邊照宏氏、マハーヴスツ地獄品(譯)の研究(佛教學

徒第四輯昭和八年二月)

(荻原) II 荻原雲來氏、同上批議 (Ibid.)

(荻原・久野) II 荻原雲來・久野芳隆兩氏、梵文 Mahāvastu-av-

adāna の研究(聖語研究第一輯昭和八年八月)

以上の他、下記マハーヴスツ英獨兩譯を参照した。

マハーヴスツ地獄品の研究

英譯・J. Jones, The Mahāvastu, Volume I, London, 1949.

獨譯・白石眞道氏、Mahāvastu (山梨大學學藝學部紀要、昭

和二十七年)

譯文中()の數字は渡邊氏の付けられたものを比較の便宜上用

した。

註9中()の數字は MV, vol. I, p. 1. の各數を採た。

この小論には、梵文マハーヴスツの地獄品を邦譯し、地獄思想を説く多くの佛教經典の中、今は資料を限つて漢譯立世阿毘曇論との對照を主とし、合わせて一連の天使經及び世起經類の代表的なものと比較しながら、この地獄品構成の新舊層を吟味し、且つその地獄思想の特色を見ようとするものである。

先ず、マハーヴスツ地獄品の構成は三部、即ち MV.

vol. i. p. 4. 1. 15~p. 8. 1. 15 の散文(假てAとする)
 Ibid. p. 9. 1. 1~p. 16. 1. 7 の韻文(B)及び Ibid.
 p. 16. 1. 8~p. 27. 1. 1 の散文(C、邦譯略)より成
 る。Aの部分は、目連が八地獄を遊歴して夫々の地獄で
 衆生が幾多の苦を受けてゐるのを觀察し、祇樹園に歸つ
 て四衆(比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷)にその様相を
 報告し、「それ故て、善(kusala)を知るべし、得べし、
 覺るべし、現等覺すべし、實踐すべし、梵行(brahm-
 acarya)を實踐すべし。そして、世間に於て如何なる惡
 業もなすべからず」と説くのがその骨子である。目連遊
 歴の物語は、更に餓鬼、畜生、阿修羅、諸天の世界に及
 ぶのであるが、この地獄遊歴の物語に續いて、B及びC
 の部分が挿入される。Bの部分では世尊自ら衆生の輪廻
 の様相を觀察して八地獄を説いたとするもので、その
 苦相、業因、名因を更に詳説したのがCの部分である。
 この中、B及びCの部分は、渡邊照宏氏が始めて指摘
 されたように漢譯立世阿毘曇論(以下立世論という)の

地獄に大體相似し、特に韻文の所はほとんど文字通り一
 致する。以下、兩者の一致及び相異點を概略示せば、
 Mv. では A. 1~8 及び増地獄、B. 序、1 及び増地獄
 2~8; C. 1~8 の順であるのに對し、立世論では A に相當
 する部分を缺き、B 及び C は Mv. では韻文と散文とを
 別々に纏めて出していたのに對して、立世論では B、序、
 C 1, B 1; C 2, B 2; 大巷地獄(散文)、C 3, B 3~
 C 8, B 8 及び増地獄(散文、韻文)、閻羅地獄の順に
 なつてゐる。即ち、偈頌の序に續いてまず散文で第一の
 地獄を詳述し、次に偈頌で重ねて略説し、順次第八地獄
 へ進むという方法をとつてゐる。このように順序が異なる
 他、Mv. になく立世論にのみ見られるものは、第一と
 第二の兩地獄の間にあるとされる大巷地獄、散文の増地
 獄の説明、及び閻羅地獄品の部分である。このような相
 違にもかゝらず、韻文の所は兩者ほとんど文字通りに
 一致し、散文の所でも、上記の Mv. に缺く部分を除く
 と、Mv. に出る文はほとんど立世論の散文の中に相應

するものを見出せるし、たゞ立世論の方がかなり説明描
寫は多くなつており、又、名因の異なる所、Mv. で描寫
が脱落したと見られる所などがある。このような照合か
ら兩者の關係を推定すると、立世論が Mv. から引用し
たものとは言い切れないが、少くとも兩者の地獄品は共
通の源泉に基づいてゐるもので、且つ、Mv. より立世
論に詳細な所、Mv. に見られない部分のある所などか
ら Mv. の地獄品は立世論のそれより僅かに年代的に前
と見えよう。

次に、Mv. の A と B 及び C との關係はどうかとい
うに、B 及び C は一連の（細かくいえば B は C よりも古
く）ものであるが、A と B ～ C とでは、前者は目連、後
者は佛陀の説として性質を異にしてゐる。概していえば
A は B ～ C より簡略になつてゐるが、更に比較の便宜
上、巴利天使經の一文（P. T. S., M. 3. 2. P. 183. 1.
3～P. 184. 1. 7. Esp. 184. 5～7）を擬して Mv. i. p.
6. 11. 7～13 (A) 及び Ibid. p. 25. 1. 14～p. 26. 1. 7

(Esp. 26. 5～7) (C) と比べると、C は少し説明の多
い所、單語の二異なる所はあるが、A よりも一層よく巴
利の上掲の文と一致する。更に又、M. 3. 2. P. 186. 11.
11～20 (Esp. 11. 8～10) をとりつゝ、Mv. i. P. 7. 1. 13
～P. 8. 1. 9 (Esp. 8. 8～9) (A) 及び立世論（大正
XXXII. 212. b～c. Mv. 〇〇〇部分）この相當文は缺
けるので立世論の相當文を選ぶ）を比べても、同様の結
果がえられる。所で、天使經については、阿育王の派遣
した傳導師の一人マハーデーバがマヒサマンダラ地方で
天使經を説いた（大史 XII）といわれる。この傳は大體
史實を傳えているとされている。その天使經が今日、中
阿舎に見られる上掲の天使經と直ちに同一であつたとは
思えないが、阿育王當時（B. C. 3rd. 後半）既に天使
經といわれるもの存したことが解る。この様な天使經
の系統の經典と部分的にはあるが一致する事實からし
て、C 乃至 B の部分は A の部分よりも古く傳を残して
ゐるものである事は推定される。

更に、大あらましの推量が許されるならば、立世論の構成は、一連の天使經（例えば、漢譯中阿含、增壹阿含大正 II. 674b~676b）及び、大樓炭經、長阿含經の世記（起）經、起世因本經等の一連の經典の世界説明（それには天使經を含む）の手法に基づいており、地獄品の材料に就いては上述の如く、Mv. と共通の源泉から取り來つたものと言えよう。一方、Mv. は特色ある目連の五道遊歷という構想で物語を展開しつつ、その中に當時まで知られていた地獄の描寫（B~O）を挿入したものと見える。更に、地獄の描寫を佛陀ならざる目連という一佛弟子が述べるといふ手法は特色あるもので、この事は、龍樹（A. D. 150—250）の著とされる大智度論に於て、一菩薩が三界五道の衆生の苦を見てその様を述べると相通するものがある。その點、マハーヴスツは大衆部の中の説出世間部の傳と自ら稱しているものであるが、この派の佛教思想史上に於ける自由な特色ある立場を示す一つの例とみることができよう。

梵文邦譯

〔目連の地獄遊歷〕（A）

さて、長老大目連は屢々、地獄遊歷に行つた。その時、八大地獄及び各十六の増地獄に於て、地獄の多種多様幾千の苦を受けている人々を見た。傳に——長老 Kollia 上座（即ち大目連）は、地獄遊歷をしながら、人々が諸地獄に於て多くの苦を受けているのを見た、等活地獄に於ては足を上に頭を下にして斧や鉞によつて殺されているのを。その上又、互に害心を抱いた者共は鐵の爪をもつて引き裂き合い、又、手に銳利な刀劍が生じ、それをもつて互に四肢を切り合い、しかも、彼らの惡業が全く盡きない間は死なない。黑繩大地獄に於ては、彼は、人々が黑繩で四肢に練をつけられて鉞で打ち殺されたり、引き裂かれたり、鋸で引き裂かれていてのを見た。そして、切り裂かれたる彼らの身體は再び回復し、悦びなき苦痛を受け、しかも、業に保持されてい

る故に、その様にして死なない。次に、衆合地獄に於ては、幾千の人々が燃えさかる焔を伴つた山に壓せられ、血の河が生じ、尙かつ、それらの山々を彼らは進む、しかも業に保持されている故に、その限りその様にして死なない。一向號叫（地獄）に於ては、幾千の人々が、燃えさかる焔を伴い煙濛々たる銅の塊りの中に投げ込まれて數千の苦しみを味つているのを見た。大叫（地獄）に於ては、燃えさかる焔を伴つた火の中に投げ込まれた人々の大いに叫ぶ聲は、輪圍、大輪圍等の山々に反響し、かの四大州（即ち）（南）閻浮提、東勝身洲、西瞿陀尼、北俱盧洲の人々の耳に聞こえた。炎熱（地獄）に於ては、幾千の人々が甚しい苦しみを受け、踵を始め頸の關節に至るまで、鐵鎚をもつて粉碎され、更に他の數千の苦しみを受けているのを見た。しかも、（彼らは）業に保持されている故に、その限りその様にして死なない。燃えさかる焔を伴つたかの大地獄に於ては、幾千の人々が生れて苦しみを受けている。周圍百由旬のかの大地獄に於

ては、東の壁より數千の焔が燃え上つて、西の壁で打ち返される。西の壁より數千の焔が燃え上つては、東の壁で打ち返される。南より燃え上つては北で打ち返される。北より燃え上つては南で打ち返される。大地より燃え上つては蒼穹で打ち返される。蒼穹より燃え上つては大地で打ち返される。これら數千の人々は周圍を走り廻る、しかも、業に保持されている故に、その限りその様にして死なない。極熱大地獄に於ては、燃え上る焔を伴つた山々があり、火刑の柱に刺されたる地獄の有情がこれらの山々を圍んでいる。かくの如き苦しみを人々は受け、しかも、業に保持されている故に、その限りその様にして死なない。それから、（この）大地獄から解放された者達は熱灰（地獄）にはまる。そして、彼らはそこ、熱灰（地獄）に於て焼かれつつ數由旬走り廻り、しかも、業に保持されている故に、その様にして死なない。熱灰（地獄）より解放された者共は、屍糞（地獄）にはまる。そこで、黒い鐵嘴をもつた生物に啄まれる、しか

も、業に保持されている故に、その様にして死なない。

そして、屍糞増地獄より解放された者共は、森の端の望ましい樹々を見る。そして、⁽²⁸⁾彼らは安樂を求めて、それら森の端へと走る。そこで、⁽²⁹⁾鷹、⁽³⁰⁾禿鶯、⁽³¹⁾鳥や鼻など鐵嘴のある者共が、柔き樹々をの如く噛み、⁽³²⁾彼らの肉を啄む。残り骨となつた時、⁽³³⁾彼らには更に又その肉、皮膚、肉、血が生じ、しかも、業に保持されている故に、その様にして死なない。これらの鳥に怯えて、⁽³⁴⁾彼らは依る邊なきを依る邊あるものと想い、⁽³⁵⁾劍葉林のある地獄坑に入る。そして、そこに入つて來た人々に風が吹きつけ、その風によつて鋭い劍葉が落ちかゝる。彼らの如何なる身體の部分も、⁽³⁶⁾遂には、毛の先端がぬけ出るだけの所までも、その様にして傷けられない所はなく、しかも、業に保持されている故に、その様にして死なない。そして、⁽³⁷⁾彼ら衆生は傷つき横たわり、⁽³⁸⁾身體は血塗れになつて無極河（即ち）⁽³⁹⁾苛酷な鹽の河にはまる、その間、⁽⁴⁰⁾彼らの軟い四肢に（水が）⁽⁴¹⁾浸徹する、しかも、業によつて

保持されている故に、その様にして死なない。又それから、⁽⁴²⁾獄卒らが鐵の鉤をもつて引き上げて、⁽⁴³⁾河岸の燃え上り燃えさかる焔を伴つた土地に投げ出された彼らにこう言つた。——「おゝ、さて、人間共よ、何を汝らは望むか。」⁽⁴⁴⁾彼らはこう言つた。——「實に飢えている、實に渴いているのである。」そこで、⁽⁴⁵⁾獄卒共は、⁽⁴⁶⁾彼らの口を燃えさかる焔を伴つた鐵の挺をもつてこじあけて、⁽⁴⁷⁾鐵の塊りを焼き、⁽⁴⁸⁾各自の口を開いて、⁽⁴⁹⁾燃えさかる焔を伴つた鐵球を口に投げ入れる。——「汝らはそれを食え。」又、⁽⁵⁰⁾溶けた赤銅を彼らに飲ませる。——「汝らは飲め」と。まさに溶解しているものは⁽⁵¹⁾彼らの唇を焼く、⁽⁵²⁾唇を焼いてつぎに舌を焼く、⁽⁵³⁾舌を焼いて口蓋を焼く、⁽⁵⁴⁾口蓋を焼いて喉を焼き、⁽⁵⁵⁾喉を焼いて内臓を焼き、⁽⁵⁶⁾内臓を焼いて直腸を通つて下部より出る、しかも、業に保持されている故に、その限りその様にして⁽⁵⁷⁾彼らは死なない。

かくの如く、尊者大目連は、⁽⁵⁸⁾八大地獄に於て衆生が數千の苦しみを受けているのを見て、「おゝ、（何たる）苦

痛か。」と云ふ、祇樹園に来て、四衆(47)に詳細に報告した。「かくの如く、衆生は八大地獄十六増に於て種々數千の苦しみを受けてゐる。それ故に、善を知るべし、得べし、覺るべし、現等覺すべし、實踐すべし、梵行を實踐すべし、そして、世間に於て如何なる惡業もなすべからずと私は言う。」⁽⁴⁸⁾かくの如く、尊者大目連の話しを聞いて、人、天ら幾多數千の者共は驚きに相遇した。⁽⁴⁹⁾地獄の様子は要するに以上の如くである。亦、詳細に私は述べらるべし。

(A) 註

- (1) (5. 2) *aham* (= *ayam*) *ca*; (荻原・久野) *aha ca* (BNACL); 後者をレ。°
 (2) (5. 3) *anubhavanta*, MSS 全部 *anubhavata* をレ°。 cf. Edgerton § 18. 49.
 (3) (5. 4) *ca kṣyantā*; (荻原・久野) *kaṣyantā*; 今は NALB ㄅㄏㄅㄅ *ca kṣyantā* をト。°
 (4) (5. 7-8) *sūtrāṅgaṃnīhataḥkṣyantāṃ*; (荻原・久野) *sūtrāṅga vāsīhi taḥkṣyantāṃ*; BNMLC ° *sūtrāṅga svā-*

フナーマニッ地獄品の研究

svā (N° *svāva* ° L *svāḥsvāva* °) *nīhitaḥkṣi* ° (C *nīhita-ḥkṣiḥ*); 疑問であるが今は刊本をとる。

- (5) (5. 13) *Ekānta-rāraṇa*, Mvyut. 4923 ㄅㄆㄏㄏ *Ra-viravah* をレ。°
 (6) (6. 2) cf. Mvyut. 3050. 南瞻部州。
 (7) (6. 2) cf. Ibid. 3047. 東勝身洲。
 (8) (6. 2-3) cf. Ibid. 3054. 牛貨州。
 (9) (6. 3) cf. Ibid. 3057. 北俱盧洲。
 (10) (6. 3) *Tapana*, cf. Mvyut. 4925. *Tapanaḥ*。
 (11) (6. 5) *kuttana*, (荻原・久野) *kuttāna*, その改める要す。 cf. Edgerton Dict.
 (12) (6. 8) *samanā*, Pkt. abl. sg. 尙 ㄅㄆㄆの炎熱地獄と變へ描寫 (6. 7-13) は (25. 14 ff.) の阿鼻地獄の描寫と通じらる。 ㄅㄆㄆの部分も阿鼻地獄の説明と通じらる。 (6. 13 ff.) の極熱地獄の次に來るべきものがそこに入つたものと考ふる。°
 (13) (6. 8) *pāvāṇa bhittva*, cf. Edgerton § 9. 61 & 10. 104. f. abl. sg.
 (14) (6. 8) *utpattiva*, Ger. of *ut-pat*.

- (51) (6. 8-10) **gye* (*hittye*), cf. Edgerton § 9. 41 (& 10. 95.) f. loc. sg.
- (16) (6. 9-12) *pratyahanyanti*, cf. Ibid. § 32. 8.
- (17) (6. 9-10) **aye* (*hittye*), cf. Ibid. § 9. 39 (& 10. 93.) f. abl. sg.
- (18) (6. 11) *dakṣiṇḍyam*, cf. Ibid. § 9. 80 f. loc. sg.
- (19) (6. 11) *taṭato*, cf. Ibid. § 8. 50, 51 (nt. abl. sg.)
- (20) (6. 13) *Pratāpa*, cf. Mvyut. 4926, *Mahatāpamañi* or *Pratāpamañi*.
- (12) (6. 14) *paricaritāni*; (接尾・久野) *parivaritāni*; 接
者ヲノ^レ。
- (23) (6. 16) *mahānirake*, loc. for abl. cf. Edgerton § 7. 82.
- (24) (6. 16) *Kukula* = Pali *Kukūla*, cf. Mvyut. 4937. *Kukulam*, 雙聲。
- (24) (6. 16) *vagchaniti*; **vagāhaniti* ヲト^レ。
- (25) (6. 16) *dahyamānāyo jana*; (接原・久野) *dahyamānā
yojana*; 接聲ヲノ^レ。
- (26) (7. 1) **ato*, = (19)。
- (72) (7. 2) *khaḥanti*, = Pali *khaḍḍanti*, pass. 3rd pl. of
khaḍ.
- (27) (7. 4) *tena*; (接原・久野) *te ca*; 接聲ヲノ^レ。
- (28) (7. 4) *kūhala*, = Pali m. (sk. ㄝノ) *kurara* ノト相應
ヲト^レ。 cf. Edgerton Dict.)
- (29) (7. 5) *abhravḥse va varṇiyitva*, 今ト (接原・久野)
ヲ相^レ …… *caravṇiyitva* ヲノ^レ。
- (18) (7. 4) *sāman*, Pkt. pl. gen. of *taṭ*; (接原・久野)
sāram (BNACM); 今ト^レ接^レヲノ^レ。
- (28) (7. 7) *alene*; BNACML *alena* ヲノ^レ。
- (28) (7. 8) *naraka-kumbha*, (BN. *kakushṭān ca*, cf. ku-
ṣṭha, f. ㄝ聲'口'入口ノ)
- (28) (7. 10) *antamasato*; (接原・久野) *antāsas nato* (BNA
[L]); 今ト^レ接^レト^レト^レ接^レヲノ^レ。
- (28) (7. 10) *bālā* = *vālā*。
- (29) (7. 11) *ca sayana*; (接原・久野) *sattivaane*; 今ト^レ
本ヲノ^レ (或ト BNACML. *gayane* ヲノ^レヲノ^レ。 cf.
Edgerton § 8. 80. Nom. pl. -*ṭe*)
- (28) (7. 12) *Vairavāni nadi*, cf. Mvyut. 4192.

々十六の増（地獄）がある。（6）四つの角と四つの門とを有し、區分され、區分毎に設計されてある。（それぞれ）高さ百由旬、周圍百由旬である。（7）鐵壁をもつて圍まれ、鐵をもつて蔽われている。それらの大地は鐵より成り、火焰を發し燃上している。（8）惡人を焼き、恐るべく、焰を出しておつて近づき難く、そして、身の毛もよ立ず、怖ろしく、苦し處である。（9）大驚怖を生ずる一切の（地獄）は百の焰に滿ち、一々は百由旬に光をもつて輝く、（10）そこには、大罪を犯した多くの兇惡な者共があり、長期間、數百年間燒かれている。（11）鐵の杖をもつて粗暴な獄卒共は罪を犯せる敵（＝惡業者）共を打つ。（12）それらに就いて私は偈をもつて順次に説こう。傾聽し、謹しんで私の説くのを汝らは聞けよ。」

(Mv. i. 10. 9—18. cf. 大正 XXXII. 207. d.)

(13)「等活地獄に於て、衆生は足を上に頭を下にして吊され、斧や鉞をもつて切られる。（14）更に、怒れる彼らは、自然に生じた鋭利な鐵の爪をもつて、忿怒

（の力）に任せて相互に引き裂き合う。（15）更に又彼らの手に鋭い劍が生じ、それらをもつて相互に、害心ある彼らは、切り合う。（16）壞滅している彼らの四肢は冷風に吹かれると、過去の業の果報の故に、彼らの四肢は生ず」（と）。（17）かくの如く、師・如來は如實によく知つて、この惡業なる者共の住居を等活（地獄）と説いた。

(Mv. i. 11. 1—12. 14. cf. 大正 XXXII. 212. c—213. a)

(18)「次に、等活（地獄）より解放されて、彼らは打たれつゝ、長く、廣く擴がつた所にやつて來て、熱灰（地獄）に陥ちた。（19）彼らは實にそこで熱灰に燒かれ、多くの苦痛を嘗めながら無數由旬を走り廻る。（20）次に、熱灰（地獄）より解放されて、長く大きく廣く、深さ百人の丈ある屍糞（地獄）に陥ちた。（21）そこでは、彼らを、槍の如く鋭い嘴をもつた虫共が、皮膚を裂いて、肉や血を貪り啜る。（22）更に、屍糞（地獄）より出てきた者共は美しい樹々を見、安樂を求めて、緑の葉に蔽われた（樹々の）所に近づく。（23）そこで、鐵嘴の鷹、禿

鷲、鳥共が、柔き樹々をの如く噛み⁽²⁴⁾、傷つき血塗れの者共を貪り食う。(24)食われて残りは骨のみとなつた時、再び彼らの皮膚、肉、血は生じる。(25)怖れて⁽²⁵⁾、走逃し依る邊なきを依る邊あるものと想ひ⁽²⁶⁾、傷つきつゝ、恐るべき劍葉林に來た。(26)それから、傷つき苦しみ血に多く塗れた彼らは、劍葉林から解放されて無極河に行く。(27)そこで、かの沸騰した鹽からい水の河に陥いる。そして、彼らの傷けられた四肢は悉く痛められた。(28)それから、獄王の卒共は鐵の鉤をもつて突き刺してから河岸に擧げ、鐵丸を食わせる。(29)赤熱し溶けた赤銅を飲ませる。彼らの内臓を通つて下部より出る。(30)善業をなさずして邪道に隨ひ、惡業をなした故に彼らは地獄に入つた。(31)諸の惡業を根本的に捨て、專一に善行をなす人々は惡趣に行かない。(32)それ故に、業は善と惡との二種の道があるが、諸の惡を捨てて清淨なる善を行ぜんことを。(又、次に、一切苦を滅する爲の貪愛なき法と知つて、清淨なる八正道を行ぜんことを。)

(Mv. i. 12. 15—13. 10. cf. 大正 XXXII. 208. b-c.)
 (33)黒繩地獄では、生樹の如くに引き倒されて⁽³⁶⁾、彼らの四肢は(黒)繩をもつて線をつけられ、斧や鉞をもつて(扱わる)。(34)それから、長時間極熱された鐵の衣が⁽³⁵⁾焼き苦しめつゝ四肢に纏りついた。(35)焼き苦しめてから鐵の衣は(四肢を)引き裂く。皮膚や肉を引き裂いて⁽⁴¹⁾血を流出する。(36)それから、黒繩地獄における多くの者共を鉞をもつて踵より頸の關節(に到るまで)切り裂いて、又碎く。(37)恐るべき暗黒にして、出來事は何も見えない所のその煙の充滿した中にも彼らは入る。(38)彼らは又そこに於て、互に何度も何度も肉の小切れを履みながら、無數由旬を走り廻る」と。(39)かくの如く、如實に師・如來はよく知つて、惡業なる者共の住居なるこれを黒繩(地獄)と説いた。

(Mv. i. 13. 11—14. 4. cf. 大正 XXXII. 209. c.)

(40)次に、衆合地獄に於ては、大なる山々の下に⁽⁴²⁾それらの中間に衆生は夥しく多く入れられている。(41)そ

して、衆生の業に縁つて、それら石山は相合して、火の團をもつての如くに、多くの衆生を苦しめる。(42)苦しめられた四肢から多くの血が流れ、更に又、身體動亂しつゝ膿の河が生じた。(43)鐵の杵の尖端で、鐵鉢の中におゐて、敵(=悪業者)共を何百年の間、歴し潰す(と)。(44)かくの如く、如來・師は如實によく知つて、悪業なる者共の住居なるこれを衆合(地獄)なりと説いた。

(Mv. i. 14. 5—14. 14. cf. 大正 XXXII. 210. b.)

(45)次に、叫喚地獄には多くの衆生が閉じ込められ、火が燃え上る時に恐怖の叫びをなしている。(46)そして、火が消える時に彼らは沈黙する。再び火が燃え上る時大聲を叫ぶ。(47)第二のものも又、叫喚と呼ばれ、身の毛もよだち、堤は無邊にして甚だ深く越え難い地獄である。(48)そこでは、粗暴な獄卒共が杖を取つて敵(=悪業者)共を數百年もの間打ちすえる(と)。(49)かくの如く、師・如來は如實によく知つて、悪業なる者共の

住居なる(これ)を叫喚(地獄)と説いた。

(Mv. i. 14. 15—15. 6. cf. 大正 XXXII. 210. c.)

(50)次に、炎熱地獄におゐては、赤熱の銅の家宅があり、火聚に等しい苦があり、(そこで)人々は赤熱せられて叫び聲を出す。(51)そこには、悪行をなし、罪を犯し悪業をなした多くの人々が閉じ込められて、煮られる。(52)焼かれ煮られたばかりの彼らを巨大な力強い、肉血を食う多數の犬が食う。(53)更に、食われて残りは骨となつたその時に、彼らの皮膚、肉、血は生ずる(と)。(54)かくの如く、師・如來は如實によく知つて、悪業なる者共の住居なるこれを炎熱(地獄)と説いた。

(Mv. i. 15. 7—15. 12. cf. 大正 XXXII. 211. a.)

(55)極熱地獄には、鐵の尖端のついた鋭い矛あり、大なる火聚の山々に満ちみちている。(56)そこには悪行をなした多くの人々が悪業の結果入り、恰も鍋に入つた魚のように閉じ込められている(と)。(57)かくの如く、師・如來は如實によく知つて、悪業なる者共の(こ

- (9) (9. 16) *saddhascphālasphāra avasatha durāsada*; (渡邊) iii. 454. 15 以下に *Kadaryatapanā ghora arcimanto durāsada* と題して Edgerton Dict. *kadarya* の頁を参照。漢譯及び Pali Jātaka vol. V. P. 266. 1. 17 以下近き例を採る。
- (10) (10. 17) *ṛāḍā*; (萩原・久野) *ṛāḍā*; BNACML 以下 *ṛāḍā* とするが、行末の *dhūhā* 以下は *dhūhā* (cf. Pali *dukkhā*) とするに似て、*dhūhā* と *dhūhā* の間に *dhūhā* とあるのは *Sloka* 調とみる要はなさ。原・久野) のように *Viparita* 調とみる要はなさ。
- (11) (10. 2) *ādāya*; (渡邊) *ādāya*; (萩原・久野) *Edgerton Dict.* を参照。以下 *ādāya* iii. 454. 18 以下を参照。
- (12) (10. 7) *teṣāṃ ahaṃ*; (渡邊) *teṣāṃ 'haṃ* (BNA), *ṇe* の次の *a* を略すことは疑問である。今 *teṣāṃ aha* (= *ahaṃ*) とし *aha* を syllable とする。
- (13) (10. 8) *śrotam ādāya*; (渡邊) *śrotam ādāya*; Edgerton Dict. *śrotam adāya* を参照。cf. Pali *soṭṭa az-ahāni*. (以下 iii. 455. 2 *śrotam mo dattu* 以下 *śrotam me dattu* 以下を参照)
- (14) (10. 12) *viradanti*; (渡邊) *virāḍanti* (cf. iii. 455. 6. *pi patenti*); 後者を参照。但し、以下の *Mv.* と漢譯とは異なる別の番號を付けるが、渡邊氏の番號を幾つか、漢譯を (14. a), *Mv.* を (14. b) とする。
- (15) (10. 13) *asino* (= iii. 455. 7); BACML. *siṇā* を参照 (cf. Edgerton § 10. 156)。
- (16) (10. 14) *pradaṣṭīmanasārāka* (書名強へに) (渡邊) *oṣā narā* (iii. 455. 8. 以下参照) (萩原・久野) もそれと見る。
- (17) (10. 14) *chindanti*; (萩原・久野) *chidyanti* (寫本全稱) 後者を参照。
- (18) (10. 15) *teṣāṃ sidanti gāṭhāni śīlavāzāhātā*; (渡邊) *teṣāṃ samchinugāṭhāṇāṇi śīlo vāyūṇi prav-ayanti* (iii. 454. 9 を借用) (萩原・久野) 刊本をとり、*sidanti* の *si* を *styaniti* (= *styananti* = *styanāṇi*) とする。今 *teṣāṃ styaniti gāṭhāni śīlo vāyūṇi pravayanti* と

ナ。〇

(81) (10. 16) *javikas*; (漢藏) *janento*; (捺画) *janantun*;

anga 卍 n. ㄩ ㄝ ㄛ ㄛ ㄛ m. ㄩ ㄝ ㄛ ㄛ ㄛ ㄛ ㄛ ㄛ ㄛ (cf. Ed-

gerton Dict.) ㄛ ㄩ ㄩ ㄝ ㄛ ㄛ ㄛ ㄛ ㄛ ㄛ ㄛ ㄛ iii. 455. 10

ㄛ ㄝ ㄛ ㄩ ㄩ ㄝ ㄛ ㄛ ㄛ ㄛ ㄛ

(82) (11. 2) *hanyamāna samāgama* *dirghamūyāta* *vis-*

aram (iii. 455. 14. *anyamanān* *saṅgama* *dirghāy-*

atana *vistarā*)

(83) (11. 6) *dirghapadāta* *visitrān* *te vidhvaṅṣita* *pa-*

urusā; (漢藏) *dirgham mahantaṃ visitrān* *ovid-*

ham *satapaṃṣaṣāṇ* (*ovidham* ㄛ ㄝ ㄛ ㄝ ㄛ iii. 455. 18

ㄩ ㄝ ㄛ); (萩原) *dirgham mahanta visitrān* *vidv-*

dham *satapaṃṣaṣāṇ* (*mahantaṃ* は 調 々 々 々 々 々 々 ㄩ

ㄝ ㄝ ㄛ と ㄝ ㄝ ㄛ ㄝ ㄝ ㄛ); 今 は (漢藏) 本 を と ㄝ

ㄝ ㄝ ㄛ *mahantaṃ* は 萩 原 本 の ㄝ ㄝ ㄛ ㄝ ㄝ ㄛ ㄝ ㄝ ㄛ. *ovidha*

ㄝ *avaviddha*, *thrown down into* ㄝ ㄝ ㄛ ㄝ ㄝ ㄛ

(21) (11. 7) *tan enaṃ kṛṣṇapṛāṇakā agni*; (漢藏) *tan*

enaṃ kṛamayo *tatra sakti*; (萩原) *anekaṃ kṛamayo*

tatra sakti; (漢譯「無敵」て依る) 今 は (漢藏) 本 を と

ㄩ ㄝ ㄛ ㄝ ㄝ ㄛ ㄝ ㄝ ㄛ ㄝ ㄝ ㄛ ㄝ ㄝ ㄛ ㄝ ㄝ ㄛ

ㄝ ㄝ ㄛ *kṛamayo* 卍 iii. 455. 19 ㄝ 參 照 ㄩ ㄩ *kṛamayo* ㄛ

方 が よ ㄝ

(22) (11. 8) *bhittvāna*; (漢藏) *bhittvāna* (BNACML); 後

者 を と ㄝ

(23) (11. 10) *saṃchannās*; (萩原・久野) *āms*; 後 者 を と

ㄝ

(24) (11. 12) *ārdravṛkṣe va varjitvā*; (漢藏) *ārdrav-*

kṣeva varjitvā (半 樹 ㄛ 如 ㄝ 折 ㄝ ㄝ ㄝ ㄝ ㄝ ㄝ ㄝ) (萩原) 漢 譯 ㄩ

ㄝ ㄝ ㄩ *varjitvā* ㄝ *carvitvā* ㄝ ㄝ ㄝ ㄝ ㄝ ㄝ ㄝ ㄝ ㄝ ㄝ ㄝ ㄝ ㄝ ㄝ ㄝ ㄝ

Edgerton Dict. "impaling them on a fresh, green tree." ?

(25) (11. 15) *bhitta*; (漢藏) *bhittvā*; 今 は 卍 本 を と ㄝ

(26) (11. 15) *alenā lensamjñino*; *alena-lensamjñino*

ㄩ ㄝ ㄝ ㄝ ㄝ *metre* は 差 支 ㄝ ㄝ ㄝ

(27) (12. 3) *tena*; (萩原・久野) *te ca*; 後 者 を と ㄝ

(28) (12. 4) *praticidhyata* (貫 ㄝ ㄝ ㄝ) (漢藏) *praticidhyata*,

今 は ㄝ

原・久野) *praticidhyata* (≡ *praticiddhāni*).

(29) (12. 7) *śulvaṃ ca*; (漢藏) *saṃhaptam* (≡ iii. 456.

- 13) それをとり (萩原・久野) もネウ。
- (38) (12. 10) *akryvāna*; (萩原・久野) °*va*; iii. 456. 16
参照及 *metre* 上後者をとり。
- (18) (12. 9) *etani*; (萩原・久野) *eta hi*; m. pl. non. 9
°*ta* 七格ヲ (Edgerton § 21. 26) *ya* 九格ヲ今ハ *eta hi*
ナト。
- (32) (12. 13) *durīpāparyāya*; (渡邊) *durīpam amāya*;
(萩原) *durīpāparyāya*; BACMLN *urīp* (萩原) 々
ナ。
- (33) (iii. 456. 21-22)
- (34) 漢譯のタ「如来人天師 如實見是已 故説圍隔獻 造惡
人住處」と繰返しの文あり。
- (35) (12. 15) *kālasūtrasmṛiṇ*; (渡邊) °*esmim*; (萩原・久
野) 々ネウ。今ハ Edgerton § 8. 63 *ra* 七格₁ヲ₁刊本を
ナ。
- (36) (12. 15) *ārdravohse va varjitāḥ*; (渡邊) *ārdravor-*
kaṣṭva varjitā; (萩原) …… *carvitā*; *ra* ハ *carvitā*
(かじられた) には意味が通じなく、今ハ刊本に從じた。
- (37) (12. 16) *teṣāṅgā*; (渡邊) *takṣanti*; (萩原・久野)
takṣanti; 寫本に近シ刊本をナ (°*taṣa*, cf. Edgerton §
21. 38.)。
- (38) (12. 17) *patvā*; (渡邊) *pativā*; 後者をナ。
- (33) (12. 18) *parivṛṣṭiṣṭi* (B); (渡邊) *parivṛṣṭiṣṭi* (Impf.
3rd pl. 下格₁° CMLAN); 後者をナ。
- (40) (13. 1) *vigrahītā*; (渡邊) *vigrahanti* (雜ナ)° (萩
原・久野) 刊本に同じ。今ハ BA *vigrahātī* (L *ghātī*;
N °*vīhātī*) 々ナ 3rd sg. for pl. ナ 九格° cf. Ed-
gerton § 25. 6.
- (41) (13. 2) *avīṇḥitam*; (渡邊) *avīṇḥantā*; 今ハ (萩原)
本の如く BNACML *avīṇḥato* (abl. sg. pres. part.) 々
ナ。
- (42) (13. 4) *kālasūtrasmṛiṇ*; (渡邊) °*esmim*; 刊本をナ
See (35)。
- (43) (13. 4) *bahū*; (渡邊) *bahūṇ* (BACML *bahū* *ur-*
°) 後者をナ。(萩原・久野) *balunṇ*。
- (44) (13. 3) *yāva adhiḥ-kāṭikāṇ*; (渡邊) *urascanehi*
kī-kāṭikāṇ; 寫本に近シ後者をナ。
- (45) (13. 4) *saṅghatīti*; (渡邊) *saṅghatīti*; (萩原)

sa(m)kanita (〔多々〕密集せり) BNAML. *samkantho*
を参照して (萩原) をとるが意味はそれをとらなう。

(46) (13. 5) *andhakārasmiṃ*; (漢語) *asmim*; 刊本を
と。 See (25)。

(47) (13. 5) *varta*; (漢語) *vartta* (通作の字) [と]は存
字の字] (萩原) *vāṭṭi* (皮) <*vāḍḍhr* (BNA *vāṭṭa*):
譯は少し異なるが (漢語) をとる。

(48) (13. 6) *saṃghaśesmiṃ*; (漢語) *saṃghāte ca*; 後者
をとる。 J. Jones 同 Prop. Noun として註せられたる。

(49) (13. 8) *anyamānyam ābramanta bādhrēsu param-*
antvatsāḥ; (漢語) *bandhesu paravyantriṇo* (相互に
〔他人の〕身を踏むしつて〔互ひに〕他を苦しめしむ) (萩
原) *paravyantiṇo*; 今は刊本をとり *paramantva* は
a high number, cf. Edgerton Dict.

(50) (13. 6) *Samghakāśmiṃ*; (漢語) *esmiṃ*; 刊本をとり
See (25)。

(51) (13. 11) *malatā parvatā adho*; (漢語) *mahaṭām*
parvatān adho; (J. Jones) *ubhavo...*, Mr. Y. is dual
を言ふべき所を pl. として表わすことと多量の Jones の
トーンマスの地獄品の研究

に改めを要せらる。今刊本をとり a m. pl. acc.
をとる (萩原・久野) をとり。 cf. Edgerton § 18. 49.

(52) (13. 12) *anturikam*; (漢語) *kām* (寫本全無にして
(萩原・久野) をとり、それをとり。

(53) (13. 12) *niṣavaso*; (漢語) *niṣa-viya* (*viya=iva*):
(萩原) *niṣavāṇe*; (萩原・久野) *niṣavata*; 今刊本
をとる cf. Edgerton Dict.

(54) (13. 14) *nibhān iya*; (漢語) *nibhānīke* (BNC [M
。]), (萩原・久野) をとり。今 *nibhama* をとり
とる。

(55) (13. 16) *śartrāsambhrāme cāpi pūyanadyo pṛav-*
artitka; (漢語) *bhramam pūte cāpi ca nāto* (〔
〔鹿山の〕割目とて身體困窮しつて〕
〔とらふ能は] こと) (萩原) *bhrame pūte asi-madyo*
---; 後二語は *pūte* (語田) として、今 BNACM
pūte (L *pūte*) をとり。 *pūte* は f. pl. nom. (cf. Edge-

rton § 9. 94) *v' nadyo* f. pl. nom. (cf. Edgerton §
10. 168 or 172) *varśatāṃ bahim*; (漢語) *varśatāṃ cāpi*

(56) (14. 2) *varśatāṃ bahim*; (漢語) *varśatāṃ cāpi*

(BNACM) ; 後者をとる。

(57) (14. 2) *subhanti* ; (渡邊) *sunanti* (BNACML *subanti*) ;

後者を *sunanti* とする。

(58) (14. 5) *Rauravasmiṅ* ; (渡邊) °*smiṅ* ; (55) 下準す。

(59) (14. 5) *janata bahu* ; (渡邊) *janantāṅ bahu* ; (萩原)

と同じで刊本をとる。

(60) (14. 6) *janitasmīṅ* ; (渡邊) °*smiṅ* ; (55) 下準す。

(61) (14. 7) *agnir nirvāti* ; (渡邊) *agni* (BNACML) *ni-*

rivāti ; 後者をとる。

(62) (14. 12) *subhanti* ; (渡邊) *sunanti* ; CM *subhanti*, L

gobhanti 下近し刊本をとる (萩原) となす。

(63) (14. 15) *Tapanasmīṅ* ; (渡邊) °*smiṅ* ; (55) 下準す。

(64) (14. 15) *taptiloho samudpātāḥ* ; (渡邊) *taptilohas-*

cyōdyata (鐵の合屋葺也) (萩原) *kaptilohamaya gharā*

(= Pali, *garā* は誤植、萩原・久野本も同じ誤植) なるこ

と疑ふが「」とある。それをとる。

(65) (14. 16) *nijśvanante ca sampāpāte* ; (渡邊) *nijśvar-*

anṛya kaptā ca (無音者「火」) 下同じ準をふれど「

(萩原) *nijśvarantṅ te ca sampāpāte* (禁せられて聲かな

く) (萩原・久野) *nijśvanante* (?) 今は Edgerton Dict.

0412 *nijśvarante ca sampāpāte* 下同 (cf. BCMLA

svaranāte, N °*svasānāte*) 。

(66) (14. 17) *janatā bahu* ; (渡邊) *janantāṅ bahu* ; 今は

刊本をとる。

(67) (15. 1) *samṅhinnā* ; (渡邊) *samsvinnā* (寫本全部) 。

後者をとる (Edgerton Dict. となす) 。

(68) (15. 1) (渡邊) *ḍakumātrā* ; (萩原) *ḍakvagatrā* 。

今は前者をとる。

(69) (15. 7) *Pratāpasmīṅ* ; (渡邊) °*smiṅ* ; (55) 下準

す。

(70) (15. 8) *parvato bhayabhairavāḥ* (L) (山神) 。

と誤る「」 (渡邊) *parvateḥ sambhūtā* (CM) (諸山

滿ち滿ちたり) 今は後者をとる。(萩原・久野) は *kuḷo*

とするがその要なし。

(71) (15. 9) *janatā bahu* ; (渡邊) *janantāṅ bahu* ; (55)

下準す。

(72) (15. 10) *anvanti* (< *ṛnavanti*, See Edgerton Dict.) ;

(渡邊) *anvanti* ; (萩原) *anvanti or anvanti* (そのかえ

(6) は疑問。今は刊本をとる。

(73) (15. 10) *kathalla* (刹利) (渡邊) *kabhalla* (|| Patl. *kaphala*, *kaphala*, 錫) (後者をとる)。

(74) (15. 9) *av. ta* 渡邊譯 (「申下」突きおそれ) (萩原) *aviddha* (買れたる) (萩原・久野) *avuta* (Pali, *impaled*); 今は刊本をとる。

(75) (15. 12) *pratyapanan ti*; (渡邊) *pratyapaneti* (AC-ML); 後者をとる。

(76) (15. 13) *tato Atvitarako ekuntavatiko dūhēho*; (渡邊) ……*narake* ……*a* ……*a*, (萩原・久野) もそう それをとる *metre* を (萩原・久野) はこの行のみ *Capala* 調であるところが *dūhēhā* は ———— の cf. (6) かの行は *śloka* 調 / ———— / ———— / ———— / ———— / とよめる。

(77) (15. 14) *mahanto kaposanāpāto ayasīngghagānāvīro*; (渡邊) *vi* (BALN) *tiposantipāta* ……*ta*; (萩原・久野) *kapo* を *tepa* とする (*metre* 上) 他は (渡邊) をとる。最後のものをとる *dūhēhā* (nt. pl. nom. cf. Edgerton § 8. 100) *malanti* (adj. m. pl. nom. cf. Ibid. § 18. 19) とは合わないが、今は Edgerton § 6. 12. Masc.

インド・ヨーロッパ地獄品の研究

modifier with nt. noun の一例とみた。

(78) (15. 15) *ayyagā hi agamsīnīṃ yulhāvī sa. v. tēp. ha*; (渡邊) ……*yulha dvāsatāpīta*, (萩原・久野) もそう。

(79) (16. 1) *paśyantī karna dr-dhātāṃ nā tasmād bhovī no gatiḥ*; (渡邊) …… *karmāna* …… *bhāsnāṃhā vi oshīva* (人は「こゝで」諸業の堅固なることを見る。灰は「遂下」水で非すと云ふは確かなり) (萩原) …… *karmāna bhāsnīṃ bhovī no masī(ka)*; (萩原・久野) *ḥīyanti karmāna* …… (萩原本下同) …… (業の堅固なるを見よ。それは灰にもならず。炭にもならず) 漢譯「由此不灰炭」では合う。今は文意の穩當な刊本をとる。

(80) (16. 3) *apī niśīrmanāṃ yasuā astī mokṣagaveśīnāṃ*; (渡邊) *apī niśīrmanāṃ asya astī mokṣagaveśīno* (この解放を求める「我れ」一人にこそ出離はある) くれ (と考へ) (萩原・久野) *yasuā* は *yasya* と改む。それをとるが *gaveśīnāṃ* は BNAML にて *gaveśīno* pl. nom. とする。

あとがき、この小論について、干潟龍祥、伊原照蓮兩先生に絶えず御指導を頂き、特に梵文の *metre* の特殊な讀み方については干潟先生に懇切な御教示を頂いた。以上記して心から感謝の意を表したい。(三十年八月)